

誇り・味方・居場所 —私の社会保障論



第1回

嘘をつかない医療 医療事故から学ぶ仕組みを

新米のお医者さんは、かつて、こう叩き込まれてきました。「ミスがあっても謝ってはいけない」「医師仲間を公に批判してはいけない」。

それが「真実を知りたい」と願う患者・家族と医療者の間に、深い溝をつくってきました。医療側も患者側も疲れ果てる不毛な裁判の温床ともなってきました。

医学生時代からこの医療界の不文律と対峙し、循環器内科の名医とうたわれ、病院長になってからも「隠さない・逃げない・ごまかさない」を貫いた医師、清水陽一さんが2011年6月、志なかばで亡くなりました。

清水さんをしのび「うそをつかない医療・文化を広げるくえにし」を結ぶ会」が2011年8月6日、東京で開かれ、全国から駆

つけた150人が、その思いを継承しようと誓いあいました。

清水さんは1999年、評判のよくない老人病院だった新葛飾病院の院長に迎えられ、日本有数の心臓病治療に強い病院に育て上げました。そのとき「嘘をつかない医療」を改革のシンボルに掲げました。スタッフには「この病院では全部開示します。ですから恥ずかしくない診療録を書いてください」と告げました。

「嘘の上塗りは必ず剥がれる」と、ミスがおきたときには包み隠さず話しました。同時に「医療ミスを起こした当事者を孤立させない」という姿勢も貫きました。

他の病院の医療事故でわが子を失った豊田郁子さんを、安全担当マネジャーに招くという前代未聞の人事もやってのけました。

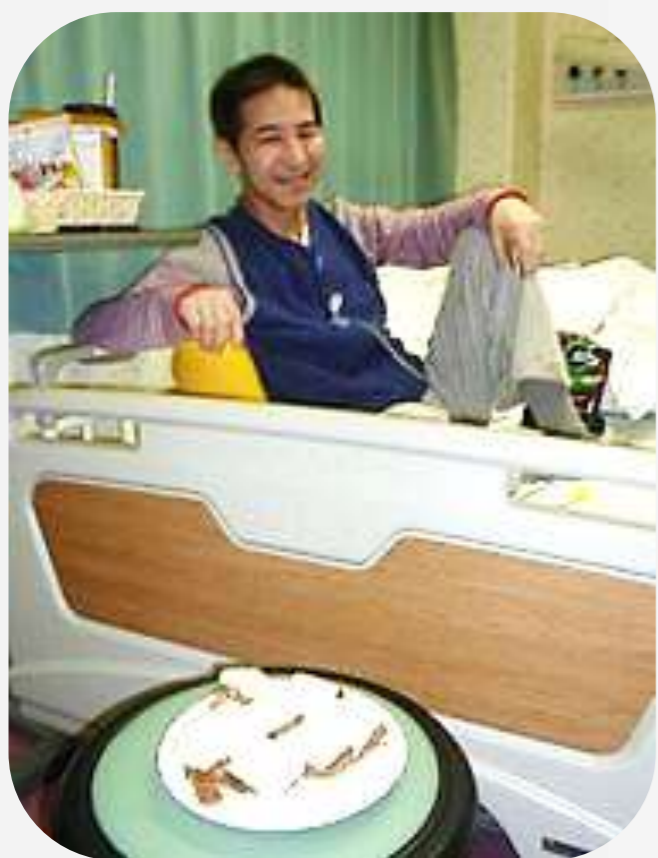
「僕も医師。患者さんの立場を忘れるかもしれない。豊田さんに見張ってもらっているんです」

厚生労働省は2008年、中立的な第三者が事故の原因を分析して再発を防ぎ、不毛な争いも避ける「医療安全調査委員会設置法案」の大綱を公表しました。航空機や鉄道の事故で使われている仕組みです。

ところが2009年、政権について民主党は「院内で調査すればよい」と待ったをかけてしまいました。ただ、政権交代前にスタートした産科医療補償制度^註では第三者委員会が分娩に関連して発症した脳性麻痺の赤ちゃんの全例原因分析を行っており、毎年公表されている再発防止に向けた報告書は、もう10回目になっています。

医療側が事故から学び、遺族や本人が「つらいけれど事故は無駄ではなかった」と納得できる新しい文化が日本で芽生えようとしているように見えます。





亡くなる1カ月前の清水陽一さん。
アドバイスを求めて訪ねた内野直樹
院長を励まそうと「勝つサンド」(写
真手前)を用意して迎えた病室の清
水さんです。



病院経営を軌道に乗せた
2008年、清水陽一さんを
癌が襲いました。そんな
清水さんを、国際医療福
祉大学大学院の公開講義
「現場に学ぶ医療福祉倫
理」の講師にお招きしま
した。驚いたのは、その
後、自身も聴講生になっ
てしまったことでした。
聴講生、院生に囲まれて。

結ぶ会の最後に、社会保険相模野病院長の内野直樹さんが、
遺影に語りかけました。

「先生に1つだけ約束できることがあります。医療現場で常に
真実をお話する、過誤は潔く認めて謝罪する、このような病院
が1つでも増えるために、何でもするという事です」

註:産科医療補償制度

出産に関連して発症した人への補償と再発防止を目的に 2009年
創設された。当事者と家族向けに保険から 3,000万円を支払い、
すべてのケースについて、医療側と家族側の情報を突き合わせ原因
分析を行う。既に約 2,500例が分析され、蘇生が不十分な例や陣痛
促進剤の不適切な使用があったことなどもわかっている。



『誇り・味方・居場所』
大熊由紀子著
B6判変型 定価 1,600円+税

*単行本
<http://lifesupport-co.com/order33/books.html>
*電子版
<http://www.shinanobook.com/genre/book/3443>

定価 1,600円(税別)